

保育者の子育てに関する一考察

－わが子の子育ての悩みに注目して－

A study on child-rearing in *Hoikusha* (kindergarten teachers and child care workers): Worries about their child

岡村 季光⁽¹⁾・間井谷 容代⁽²⁾・谷本 一榮⁽³⁾

Toshimitsu OKAMURA, Hiroyo MAITANI, Kazue TANIMOTO

要旨 (Abstract)

本研究では、第1に、現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること、第2に、保育者の子育てに関する悩みと、保育者としてのアイデンティティ形成、パーソナリティ、職務についての認識、職業観との関連について検討した。各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため、両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。その結果、子のいない者は、子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性があり、保育者の経験をネガティブに捉えている者は、情緒不安定な傾向にあることが考えられた。一方、保育者として誇りを持っている者は、他者からの承認が支えになっていることが考えられた。また、子のいる者は、自らの子育て経験が保育者としての誇りや保育者という認識の柔軟性と関連し、保育者としてのアイデンティティ感覚とつながっていることが考えられた。パーソナリティ面でも精神的に安定している傾向がうかがえた。一方、保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は、アイデンティティの揺らぎを感じており、パーソナリティ面でも外に向かっていこうとする気持ちが減少していることがうかがえた。

キーワード：(子育て支援) (保育者) (子育ての悩み) (職務行動・職業観) (パーソナリティ)

I. はじめに

近年、幼稚園、保育所、認定こども園において、子育て支援が重要視されている。従前より保育所では『保育所保育指針』において、子育て支援に関する言及はされていたが、幼稚園は、2007年に改正された学校教育法を契機に、2008年の『幼稚園教育要領』改定において子育て支援により明確に言及がされるようになった。すなわち、「幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力に配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、地域における幼児期の教育のセン

(1) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

(2) 関西福祉科学大学社会福祉学部臨床心理学科

(3) 奈良保育学院教育保育専門課程保育科

ターとしての役割を果たすよう努めること。」(文部科学省, 2008) とある。

しかし、保育者自身が子をもつ保護者となりえることは容易に想像がつくものの、保育者の子育てに関しては、近年の子育て支援の施策や取り組みに比して注目されていない。これまでの先行研究において保育者の子育てに関する研究は、筆者の知る限り徳田・水野(2000; 2002)以外は主に見当たらない。保育者は、世間では幼児期の子育てのプロであるというピリフがある一方、保育者としての立場とわが子の保護者としての立場間でジレンマを感じ、そのプレッシャーに押しつぶされそうになりながら、がんばって仕事を続けている者も多い(横山・横山・徳田・水野・横山・金子, 2000)。上述の指摘から、保育者の子育てについて研究し、その実態を明らかにすることは意義深いものと考えられる。

そこで本研究では、現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすることを第1の目的とする。なお、本研究において、徳田・水野(2000; 2002)で指摘された子育ての悩みに関する項目のほか、「ママ友」という概念に注目して検討を行った。ママ友とは、「子どもを通じて知り合った仲間」(大嶽, 2014)であり、一般的な友人関係とは異なり、母親同士の感情だけで友人関係の強弱を規定できるものではなく、母親とペアで関係を構築している子ども同士の存在を介した間接的な関係というのが特徴の1つである(宮木, 2004)。また、ママ友は重要な対人関係であるとともに、しばしばネガティブ感情や対人葛藤を生じさせる(中山・池田, 2014)ことが指摘されており、保育者の子育てに関する悩みと関連が深いことが予見されたからである。

また、徳田・水野(2000; 2002)は保育者の子育てに関する悩みについてアンケート調査を行っていたが、他変数との関連は検討していない。そこで、本研究の第2の目的として、保育者の子育てに関する悩みと、保育者としてのアイデンティティ形成、パーソナリティ、職務についての認識、職業観との関連について検討する。ママ友関係における葛藤経験の背後には、個人のパーソナリティ特性が潜在的要因として存在することが考えうる(中山・池田, 2014)。また、子育てにおける経験が、保育者の職務についての認識、職業観、ひいてはアイデンティティ形成と関連することが予想される。それ故、上述の諸変数との関連を実証的に検討することは、保育者の子育て支援に関する見地を広げ、今後の保育相談を考察する上での一助となることが期待できる。

II. 方法

調査対象 奈良県内にある幼稚園・保育所・託児所・認定こども園に勤務する者のうち、本研究の調査に同意した保育者125名(男性5、女性120)(表1)。平均年齢は35.90歳(SD 12.77、範囲20歳~66歳)、保育者歴は平均11.84年(SD 9.92、範囲0年~45年、未記入者3名)であった。年齢の分布において、公立または幼稚園においては30代以降にやや人数分布に偏りがみられるものの、ほぼ一様であった。一方、私立または保育所においては20代が約半数を占めていた。また、子のいない者は66名、子のいる者は59名であった。

表1 調査対象者の属性(数字は人数)

公私立別	所属別				合計
	幼稚園	保育所	託児所	認定こども園	
公立	25	0	0	1	26
私立	6	84	9	0	99
合計	31	84	9	1	125

調査内容 フェイスシートにて性別、年齢、結婚経験、子の有無、保育者歴、過去に経験した勤務先（公立または私立の幼稚園・保育所・認定こども園、その他経験した職種）の有無を尋ねた後、以下の調査を行った。

a) **保育者の意識調査** 中山・池田（2014）及び徳田・水野（2000；2002）を参考に、保育者の子育てに関する意識について13項目を設定した。具体的な項目は表2に示す。

b) **サービス化した組織における成員裁量の職務行動尺度（以下、職務行動尺度）** 上司が物理的に近くに存在せず、個別の評価を受けにくい状況で、顧客のニーズに対応するという職務を遂行するにあたって、実質的に成員が自分の裁量であると認知する職務行動、すなわち、どの程度努力するかを成員自身が決めることができる職務行動を測定する。吉原・古川（2007）が先行研究を参考にして、サービス化した組織に適当な項目を作成した。吉原・古川（2007）は、サービスの生産や生産に関連する職務行動のうち、組織の成果に影響を与え、裁量の大きな行動として、次の4つの下位尺度を設定した。すなわち、チームの水準維持のためにチームに貢献しようとする「仲間の支援」5項目、外部の人との対応において、組織の信頼やイメージや評判を向上させるような行動をどの程度とるかを測定する「外部評価の向上」6項目、顧客や組織の期待に応えるための達成水準を自分で設定する「仕事の達成水準」5項目、上司による恒常的な管理が困難な中で、組織の価値観や定められた方法を守る「組織価値の遵守」4項目の合計20項目であった。

なお、本研究では調査対象者の所属を考慮し、原尺度の文言にあった「会社」は文脈に応じて「保育者」または「園」に、「顧客」は「保護者」にするなど改変を行った。

c) **多次元自我同一性尺度（MEIS）** アイデンティティを個人の状態として、どの程度形成しているかを測定する。谷（2001）が Erikson（1959）の記述から自我同一性概念の定義に関する記述を抜き出して作成した。自己の不変性及び時間的連続性の感覚である「自己斉一性・連続性」、自己についての明確さの感覚である「対自的同一性」、本当の自分自身と他者からみられているであろう自分自身が一致するという感覚である「対他者的同一性」、自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚である「心理社会的同一性」各5項目の合計20項目であった。

d) **日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)** Gosling, Rentfrow, & Swann（2003）によって構成された、Ten Item Personality Inventory（TIPI）の日本語版である。小塩・阿部・カトローニ（2012）が作成した。10項目で Big Five の5つの次元を測定する。5つの次元とは、外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性である。1つの次元で2項目ずつ構成されていた。

e) **職業観** 尾高（1941）による職業の定義に従い、浦上（2015）が作成した。経済的側面、個人的側面、社会的側面のそれぞれに対して2項目ずつ計6項目を準備した。経済的側面については、「私にとって職業は、私の望む生活をするために必要なお金を得るために重要である」と「私にとって職業は、生計を立てるために重要である」、個人的側面については「私にとって職業は、私の持っている力を発揮する場として重要である」「私にとって職業は、自分の知識や技能を活用できる場所として重要である」、社会的側面については、「私にとって職業は、社会の一員として自分の役割を果たすために重要である」、「私にとって職業は、社会に貢献する手段として重要である」という項目であった。

調査手続き 2016年7月～8月にかけて、第2著者及び第3著者が奈良県内にある幼稚園・保育所・託児所・認定こども園に訪問し、研究協力に同意した保育者に上述の質問紙を手渡し、その1～2週間後に第2著者及び第3著者が再訪問し、質問紙を回収した。なお、回答を求めた調査は以下の通りであった。

1) **保育者の意識調査** 調査内容 a) で示した質問項目について、「5：とてもそう思う」から「1：まったく

そう思わない」までの5段階であった。

2) 職務行動尺度 調査内容b) で示した質問項目について、日頃の職場での自身の行動の頻度はどの程度か、「5. いつもしている (行動の頻度100%)」「4. だいたいしている (行動の頻度75%)」「3. 半分くらいはしている (行動の頻度50%)」「2. あまりしていない (行動の頻度25%)」「1. まったくしていない (行動の頻度0%)」までの5段階であった。なお、各項目すべてをしていることが望ましいというような評価の類ではない旨を併せて教示した。

3) MEIS 調査内容c) で示した質問項目について、「5:非常にあてはまる」から「1:まったくあてはまらない」までの5段階であった。

4) TIPI-J 調査内容d) で示した質問項目について、「7 強くそう思う」から「1 全く違うと思う」までの7段階であった。

5) 職業観 調査内容e) で示した質問項目について、「5:強くそう思う」から「1:まったくそうは思わない」までの5段階であった。

Ⅲ. 結果と考察

属性別の検討 分析において、託児所に所属する調査対象者が少数であったため、託児所に所属する者は保育所の者と合併した。また、認定こども園に所属する者も同様に、過去に経験した勤務先を勘案し幼稚園に所属する者と合併した。

公私立別及び校種別で各変数の平均値による差の検定 (t 検定) を行った。その結果、公私立別においては「対自的同一性」($t(125)=2.15, p<.05$) 及び「対他者的同一性」($t(126)=2.48, p<.05$)、校種別では「社会的側面」($t(125)=2.42, p<.05$) において有意な差を見出し、すべて公立または幼稚園所属の得点が高かった。しかし、上述の結果は、年齢分布の偏りによる影響と考えられた。そこで、年齢の中央値 (34歳) を含む高群と低群に分け、改めて各変数の平均値による差の検定 (t 検定) を行った。その結果、全体の約半数弱の変数において有意な差を見出した。詳細の結果を表2に示す。

本研究の結果は、保育者の意識調査の項目1、3、7において、年齢低群の方が場面における対応について経験や知識が不足していると感じているのかもしれない。職務行動尺度の「仲間の支援」及び「外部評価の向上」において、年齢高群が年齢低群に比して得点が高かったのは、年齢高群において主任など保育者のリーダーとして地位についている者が多いことが推察され、立场上保育の水準維持のために貢献しようとする、あるいは園の信頼やイメージ等を向上させるといった行動をとろうとしていることが考えられた。MEIS のすべての下位尺度において、年齢高群が年齢低群に比して得点が高かったのは、年齢が高くなるにつれ自我同一性の確立がすすんだものと考えられる。ただし、特に年齢高群においては自我同一性の再体制化 (岡本, 2002) という過程も考えられるが、本研究の結果からは推察することはできない。TIPI-J の「協調性」において、年齢高群が年齢低群に比して得点が高かったのは、川本・小塩・阿部・坪田・平島・伊藤・谷 (2015) の結果を支持するものであった。また、「外向性」も同様の結果であったのは、年齢高群ほど保育者歴も長く勤めている者が多いと推察され、保育者として経験を積み重ねるにつれ、保育者として求められるパーソナリティに変化したのかもしれない。職業観の「個人的側面」及び「社会的側面」において、年齢高群が年齢低群に比して得点が高かったのは、上述の結果と同様に、年齢高群において保育者として経験を積み重ね、主任などの地位に就いていることが、自らの自我同一性確立や社会への貢献感につながっていることが考えられた。

表2 各変数の年齢別基礎統計量

項 目		全体 (<i>N</i> =120～125)		年齢低群 (<i>n</i> =56～60)		年齢高群 (<i>n</i> =63～65)		<i>t</i>	<i>d</i>
		平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>	平均	<i>SD</i>		
<保育者の意識調査>									
1.	ママ友（いなくとも“いる”として想定してください）との関係に悩む。	2.79	1.08	3.04	1.04	2.58	1.07	2.33 *	.42
2.	ママ友（いなくとも“いる”として想定してください）に子育てに関して頼られたいと思う。	2.67	.86	2.70	.85	2.65	.87	.32	.06
3.	子の担任（子がいなくとも“いる”として想定してください）との関係に悩む。	2.57	.92	2.82	.83	2.34	.95	2.91 **	.53
4.	保育者としての経験が、子育てに役立っている（または役立つであろう）と思う。	4.10	.78	4.18	.69	4.03	.85	1.03	.19
5.	保育者であることを誇りに思う。	4.09	.78	3.95	.75	4.22	.79	1.95	.35
6.	保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う。	2.81	1.12	2.93	.88	2.69	1.30	1.20	.21
7.	子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう。	2.69	.88	2.85	.89	2.54	.85	1.98 *	.35
8.	子育てが上手と思われることにプレッシャーを感じる。	2.96	.98	3.00	.93	2.92	1.04	.43	.08
9.	時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある。	3.62	1.18	3.72	1.14	3.52	1.21	.92	.16
10.	自分の子（いなくとも“いる”として想定してください）は自分の手で子育てをしたいと思っている（または思っていた）。	4.02	.96	4.00	.96	4.03	.98	.18	.03
11.	自分の子（いなくとも“いる”として想定してください）に習い事を熱心にさせたいと思っている（または思っていた）。	3.12	.89	3.03	.88	3.20	.90	1.04	.19
12.	保育者は子どもの手本となるべきである。	4.19	.70	4.08	.72	4.29	.68	1.67	.30
13.	親は子どもの手本となるべきである。	4.27	.76	4.25	.77	4.29	.74	.31	.06
<職務行動尺度>									
	仲間の支援	19.51	2.58	18.82	2.53	20.15	2.47	2.99 **	.53
	外部評価の向上	22.83	3.03	21.82	2.81	23.79	2.94	3.81 ***	.68
	仕事の達成水準	17.98	2.99	17.52	2.94	18.42	3.00	1.70	.30
	組織価値の遵守	15.75	2.08	15.15	1.91	16.32	2.08	3.26	.58
<MEIS>									
	自己斉一性・連続性	17.52	4.48	16.47	4.11	18.49	4.62	2.58 **	.46
	対自的同一性	16.79	3.67	15.42	3.16	18.08	3.66	4.32 ***	.77
	対他的同一性	16.10	3.40	15.18	3.09	16.94	3.48	2.97 **	.53
	心理社会的同一性	16.34	3.31	15.68	2.76	16.94	3.67	2.15 *	.38
<TIPI-J>									
	外向性	8.54	2.47	8.05	2.50	9.00	2.37	2.18 *	.39
	協調性	9.38	1.96	9.02	1.81	9.71	2.05	1.99 *	.35
	勤勉性	7.14	2.10	6.77	1.86	7.48	2.26	1.91	.34
	神経症傾向	8.77	2.01	9.08	1.92	8.48	2.07	1.70	.30
	開放性	7.17	1.99	7.20	1.95	7.14	2.04	.17	.03
<職業観>									
	経済的側面	7.29	2.00	7.18	1.95	7.39	2.05	.58	.10
	個人的側面	6.50	1.87	6.07	1.51	6.89	2.09	2.48 *	.45
	社会的側面	6.67	1.74	6.28	1.51	7.03	1.87	2.44 *	.44

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

保育者の意識調査項目内の関係 上述の通り、年齢による各変数への影響が考えられたため、年齢及び保育者歴を統制変数にした保育者の意識調査における偏相関 (r) を子の有無別に算出した。結果を表3に示す。子の有無にかかわらず、「1.ママ友との関係に悩む」と「3.子の担任との関係に悩む」に中程度の正の相関、「12.保育者は子どもの手本となるべきである」と「13.親は子どもの手本となるべきである」に中程度～やや高い正の相関がみられた。上述の結果は、対人関係上の悩みは誰に対しても持ち、人の上に立つという状況において、子どもの手本となるべきであるというピリフが生じやすいことがうかがえた。以下、保育者の意識調査における項目において、子の有無別に比較的関連が強い項目の傾向を示す。

子のいない者は、「1.ママ友との関係に悩む」と「6.保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う」、「5.保育者であることを誇りに思う」と「8.子育てが上手と思われることにプレッシャーを感じる」、「6.保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う」「7.子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう」と「9.時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある」にそれぞれ弱い正の相関がみられた。これらの結果は、自ら子を育てた経験がないことが、保育者としての自信のなさにつながっていることが考えられた。また、「12.保育者は子どもの手本となるべきである」「13.親は子どもの手本となるべきである」はそれぞれ「5.保育者であることを誇りに思う」「10.自分の子は自分の手で子育てをしたいと思っている」と中程度の正の相関がみられ、保育者として誇りを持っている者は、自身が幼児期の子育てのプロであり、模範となるべきであるというピリフを持っていることが示唆された。

子のいる者は、「5.保育者であることを誇りに思う」と「7.子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう」「9.時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある」、「6.保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う」と「13.親は子どもの手本となるべきである」にそれぞれ弱い負の相関がみられた。子育てという見通しが立ちにくい営みの中で、他の情報に振り回されることなく、自らの子育て経験が保育者としての誇りや保育者という認識の柔軟性と関連していることが考えられた。一方、「7.子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう」と「8.子育てが上手と思われることにプレッシャーを感じる」に中程度の正の相関がみられ、子育てに対する不安感が、子育てに関する文献へのとらわれとプレッシャーに表れていることが考えられた。

表3 保育者の意識調査における偏相関係数 (r)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 ママ友との関係に悩む		.01	.52***	-.15	.04	.35**	.08	.16	.18	-.13	-.15	-.05	-.09
2 ママ友に頼られたい	.21		.22	.06	.24	-.14	.14	.28*	-.02	-.02	.20	.11	.10
3 担任との関係に悩む	.41**	.24		.02	.04	.27*	.14	.04	.34**	-.08	.03	-.21	-.07
4 保育者が子育てに役立つ	-.01	.28*	-.07		.45***	.03	-.01	-.09	-.08	.20	.16	.25	.27*
5 保育者を誇りに思う	.07	.27*	-.14	.29*		-.01	.18	.43***	-.04	.15	.00	.43***	.52***
6 保育者経験がマイナス	.14	.02	.26	-.15	-.18		.08	.08	.35**	-.05	-.06	-.28*	-.09
7 子育て情報にとらわれ	.29*	.19	.38**	-.09	-.39**	.18		.21	.39**	-.11	.02	.04	.19
8 プレッシャー	.28*	.08	.24	-.09	-.20	.20	.54***		.11	.12	-.21	.21	.13
9 保育者の仕事に疲れ	.34*	-.03	.11	.10	-.38**	.24	.25	.28*		.09	.01	.07	.20
10 子は自分で子育て	.24	.22	.15	.08	.00	.03	.35**	.31*	.24		-.02	.40**	.37**
11 習い事を熱心にさせたい	.10	.35**	.02	.04	.00	-.14	.33*	.04	.01	.10		.10	.05
12 保育者は子の手本	-.05	.02	-.20	.00	.14	-.27*	-.05	-.16	-.24	.18	-.01		.72***
13 親は子の手本	-.12	-.04	-.34*	.09	-.17	-.37**	-.02	-.07	-.03	.05	-.07	.57***	

年齢及び保育者歴を統制。右上は子どもがいない者 ($n=56\sim60$)、左下は子どもがいる者 ($n=52\sim54$) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

保育者の意識調査と各変数間の関係 年齢及び保育者歴を統制変数にした保育者の意識調査と各変数間の偏相関（ r ）を子の有無別に算出した。結果を表4及び表5に示す。子の有無にかかわらず、「5.保育者であることを誇りに思う」と「組織価値の遵守」、「12.保育者は子どもの手本となるべきである」と「仲間の支援」「組織価値の遵守」に中程度の正の相関がみられた。保育者としての規範を守ろうとすることが、保育者を誇りに感じることにつながることが考えられた。また、「9.時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある」と「自己斉一性・連続性」に弱い負の相関がみられ、時間的な連続性を感じている者は、今後も保育者として仕事をし続けるという意欲を持っていることがうかがえた。以下、保育者の意識調査における項目において、子の有無別に比較的關係が強い項目の傾向を示す。

子のいない者は、「5.保育者であることを誇りに思う」「8.子育てが上手と思われることにプレッシャーを感じる」と「外部評価の向上」「仕事の達成水準」に中程度～弱い正の相関がみられ、他者から認められることは、プレッシャーと感じつつ、保育者としての誇りにつながっていることが考えられた。また、「13.親は子どもの手本となるべきである」と職務行動尺度に中程度～弱い正の相関がみられ、保育者が自ら率先して園のイメージ向上に努力している者は、保護者にも子の手本になってほしいという思いが強い傾向がみられた。さらに「6.保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う」と「神経症傾向」に弱い正の相関がみられ、保育者の経験をネガティブに捉えている者は、情緒不安定な傾向にあることがうかがえた。

子のいる者は、「5.保育者であることを誇りに思う」と MEIS の各下位尺度と中程度の正の相関、「7.子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう」「8.子育てが上手と思われることにプレッシャーを感じる」「9.時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある」と MEIS の各下位尺度に中程度～弱い負の相関がみられた。保育者であることに誇りを持っていることが、保育者としてのアイデンティティ感覚を持ち合わせていることとつながっていることが考えられた。一方、保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は、アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。TIPI-J との関連においては、「5.保育者であることを誇りに思う」は

表4 保育者の意識調査と各変数間の偏相関係数（ r ）：子どもがいない者（ $n = 55 \sim 60$ ）

保育者の意識調査	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
仲間の支援	-.06	.16	-.12	.19	.31*	-.06	.01	.24	-.04	.27*	.10	.39**	.35**
外部評価の向上	.04	.18	-.02	.06	.35**	-.04	.11	.45***	-.08	.20	.00	.34**	.36**
仕事の達成水準	.00	-.07	-.04	.15	.38**	.15	.02	.37**	-.01	.03	-.15	.25	.26*
組織価値の遵守	.02	.03	-.05	.06	.41**	-.08	.14	.31*	.01	.27*	.05	.49***	.49***
自己斉一性・連続性	.02	-.20	-.16	.12	.10	-.21	-.23	-.04	-.33**	.24	.00	.08	.16
対自的同一性	.11	.12	.15	.09	.05	-.05	-.13	-.10	-.07	.07	.21	.01	.06
対他的同一性	-.11	-.21	-.17	.09	.09	-.20	-.16	-.03	-.23	.17	.13	.15	.20
心理社会的同一性	.02	-.13	-.06	.25	.19	.09	-.08	.12	-.24	.16	.28*	.08	.15
外向性	-.10	-.10	-.12	.29*	.13	-.15	-.11	.03	-.22	.09	.06	.08	.18
協調性	-.22	-.12	-.16	.08	.21	-.18	-.01	-.11	-.10	.06	.08	.17	.25
勤勉性	.05	.16	.18	.10	.20	-.05	.07	.02	-.10	-.01	.15	.13	.15
神経症傾向	.26*	.13	.10	-.04	.06	.39**	.01	.00	.12	.19	-.13	.13	.13
開放性	.10	-.09	-.08	.12	.11	.15	-.01	.12	.15	-.01	.22	.03	.02
経済的側面	.21	.00	-.05	-.04	.12	.23	-.10	.18	.28*	.03	.01	.12	.05
個人的側面	.12	.09	-.07	.05	.31*	.14	-.22	.33*	.05	.14	-.08	.25	.19
社会的側面	.15	-.01	.12	.22	.30*	.19	-.14	.06	.08	.16	.00	.21	.23

年齢及び保育者歴を統制。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表5 保育者の意識調査と各変数間の偏相関係数 (r): 子どもがいる者 ($n=52\sim54$)

保育者の意識調査	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
仲間の支援	.05	.13	-.25	-.08	.27*	-.21	-.06	.02	.00	.16	.07	.33*	.07
外部評価の向上	.21	.14	-.13	-.09	.20	.14	-.09	-.12	.08	.18	.11	.26	-.02
仕事の達成水準	.23	.13	-.11	.00	.20	.06	.10	.06	.16	.11	.19	.32*	.12
組織価値の遵守	.13	.09	-.20	.16	.31*	-.10	-.21	-.22	.10	.16	-.09	.39**	.15
自己斉一性・連続性	-.29*	.11	-.23	.14	.54***	-.23	-.41**	-.45***	-.49***	-.18	.04	.09	-.09
対自的同一性	-.15	.13	-.21	-.09	.45***	-.19	-.34*	-.42**	-.42**	-.33*	.27*	.14	-.11
対他的同一性	-.34**	.04	-.29*	.03	.48***	-.26	-.48***	-.43**	-.51***	-.24	-.01	.33*	.03
心理社会的同一性	-.08	.27*	-.09	.15	.43**	-.10	-.21	-.39**	-.26	-.08	.13	.15	-.04
外向性	-.30*	.06	-.16	-.03	.09	-.13	-.23	-.24	-.51***	-.24	-.09	.00	.08
協調性	.05	.05	-.21	.09	.27*	-.13	-.20	-.24	.04	.18	-.06	.17	-.01
勤勉性	-.11	.19	-.12	.21	.39**	-.35**	-.36**	-.24	-.26	-.03	-.08	.14	.09
神経症傾向	.02	-.11	.14	-.31*	-.46***	.22	.30*	.20	.18	.14	-.17	.16	.13
開放性	-.15	-.04	-.03	-.09	.03	.07	-.09	-.08	-.33*	-.40**	.03	-.06	-.05
経済的側面	.09	.09	-.03	-.14	.04	-.23	.04	.13	.14	.09	.26	-.07	.01
個人的側面	-.01	.11	-.12	-.17	.32*	-.13	-.25	-.19	-.23	-.14	.17	.06	.04
社会的側面	-.04	.07	-.18	-.21	.30*	-.19	-.14	-.26	-.26	-.11	.27*	.08	.05

年齢及び保育者歴を統制。* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

「勤勉性」と弱い正の相関、「神経症傾向」とは中程度の負の相関がみられた。保育者として誇りを持つことは、自らを律し、精神的にも安定している傾向がうかがえた。「6.保育者としての経験が、逆にマイナスになることがあると思う」「7.子育てに関する本や雑誌の情報にとらわれてしまう」は「勤勉性」と弱い負の相関であった。子育てに関する自信のなさが自己統制力の弱さに表れたのかもしれない。「9.時々、保育者として仕事を続けることに疲れてしまうことがある」は「外向性」と中程度の負の相関がみられた。保育者として仕事をするものの疲れが、外に向かっていこうとする気持ちの減少と関連していることが考えられた。「10.自分の子は自分の手で子育てをしたいと思っている」は「開放性」と中程度の負の相関がみられた。わが子の子育てを他者にまかせるという発想よりも、自分の子どもは自分で育てるという考えが強く表れたのかもしれない。

まとめと今後の課題 本研究の目的は、第1に、現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること、第2に、保育者の子育てに関する悩みと、保育者としてのアイデンティティ形成、パーソナリティ、職務についての認識、職業観との関連について検討することであった。年齢及び保育者歴による影響が考えられたため、両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。その結果、子のいない者は、子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性があり、保育者の経験をネガティブに捉えている者は、情緒不安定な傾向にあることが考えられた。一方、保育者として誇りを持っている者は、他者からの承認が支えになっていることがうかがえた。また、子のいる者は、自らの子育て経験が保育者としての誇りや保育者という認識の柔軟性と関連し、保育者としてのアイデンティティ感覚とつながっていることが考えられた。パーソナリティ面でも精神的に安定している傾向がうかがえた。一方、保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は、アイデンティティの揺らぎを感じており、パーソナリティ面でも外に向かっていこうとする気持ちが減少していることがうかがえた。

本研究では公立の保育士から調査が得られていないため、すべての校種の保育者を網羅した結果ではないこと、サンプルサイズが小さいという問題点はあったものの、保育者の子育てに関する悩みを諸変数との関連から実証的に検討し、保育者の子育て支援に関する見地を広げたことは意義深いと考えられる。しかし、本研究の課題として

2点挙げられる。

第1に、年齢及び保育者歴を統制し子の有無別で算出し検討したものの、年齢の影響を完全に統制できていない点である。全体的に、子のいない者は年齢が低く、子のいる者は年齢が高い傾向があり、年齢が高くかつ子がいない者は少数であった。それ故、子の有無に群を分けた時点で年齢の要素が入り込んでいる可能性が残された。

第2に、保育者の子育て支援について、具体的な示唆を得るには不十分であることが挙げられる。特に、子のいる者は、保育者として「集団」にかかわる保育活動と、親として「個」に向き合うわが子の子育ての違いに戸惑いがあるものと考えられる。両者の葛藤をどう乗り越えられるのか、という点を今後の検討課題とし、引き続き保育者特有の子育てに関する悩みに焦点を当てることで、さらに保育者の子育て支援について実証的研究を重ねていきたい。

文献 (References)

- Erikson E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性 誠信書房
- Gosling, S. D., Rentfrow, P. J., & Swann, W. B., Jr. (2003). A very brief measure of the Big-Five personality domains. *Journal of Research in Personality*, 37, 504-528.
- 川本 哲也・小塩 真司・阿部 晋吾・坪田 祐基・平島 太郎・伊藤 大幸・谷 伊織 (2015). ビッグ・ファイブ・パーソナリティ特性の年齢差と性差：大規模横断調査による検討. 発達心理学研究, 26(2), 107-122.
- 宮本 由貴子 (2004). 「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割—ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—. ライフデザインレポート, 159, 4-15.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 中山 満子・池田 曜子 (2014). ママ友関係における対人葛藤経験とパーソナリティ特性との関係性. パーソナリティ研究, 22(3), 285-288.
- 尾高 邦雄 (1941). 職業社会学 岩波書店
- 岡本 祐子 (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房
- 大嶽 さと子 (2014). 「ママ友」関係に関する研究の概観. 名古屋女子大学紀要 家政・自然編, 人文・社会編, 60, 37-43.
- 小塩 真司・阿部 晋吾・カトロニ ピノ (2012). 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21(1), 40-52.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—. 教育心理学研究, 49(3), 265-273.
- 浦上 昌則 (2015). 大学生の職業観と職業不決断—尾高 (1941) による職業の定義に基づいた職業観の把握—. アカデミア (人文・自然科学編), 9, 41-56.
- 徳田 克己・水野 智美 (2000). 保育者の子育てに関する調査研究. 実践人間学, 2, 1-6.
- 徳田 克己・水野 智美 (2002). 保育者は子どもの「手本」になり得ているのか. 民病研, 145, 1-13.
- 横山 さやか・横山 知弘・徳田 克己・水野 智美・横山 範子・金子 さつき (2000). 保育者の子育てⅠ—保育者であることゆえの子育てのむずかしさについて—. 日本保育学会大会第53回研究論文集, 880-881.
- 吉原 克枝・古川 久敬 (2007). サービス化した組織における成員裁量の職務行動とその促進要因に関する研究 —

組織に対する外部評価への敏感さの促進効果－. 産業・組織心理学研究, 21(1), 27-39.